

読むことの実践—アメリカ日本文学会の現在—

関根英二 (パデュー大学)

アメリカ日本文学会は1991年にはじまり、現在も活動が続けている学会ですが、その最近の活動をご紹介しながら、アメリカで、いま、日本文学がどう読まれているのかを考えてみるのがトピックです。発題用の下書きとして、以下に箇条書き式に論点を列挙していきます。

一番めだつ傾向として、作品を歴史主義的に読む、歴史の特定の文脈の中で作品のポジションを見定めるという読み方が多い。これはひろい意味でのカルチュラル・スタディーズの読み方ですが、このアプローチの場合、作品を文化・歴史資料の一部として読む傾向が強く、読み手は作品に距離をおいて外から観察するのが主流です。

文学を文化の一部として読もうという前提は、最近の大会のテーマの選び方からもうかがえます。「風景論」(04)、「印刷文化論」(05)、「表象文化としての旅」(06)、「文学理論」(07)、「パロディ」(08)、「ポストジェンダーの時代」(09)が、ここ6年の大会の主題で、いずれも、テーマ化された文化環境の中で文学のポジションなり役割を考えるというアプローチになっています。

文化・歴史の中で文学作品を読むというアプローチの典型として以下、いくつか例を引きます。「印刷文化と文学」という特集の論文では、久生十蘭『キャラコさん』を『新青年』発表当時(1939)の文脈に戻してたどり直し、作品の矛盾した性格を論じたものがあります(Michiko Suzuki)。作品は、一方で、戦時の儉約や質実の美德を主張し、戦争とナショナリズムを賛美するが、もう一方で、混血やコスモポリタンな人物を配し、豪華なファッションやエロチックな場面も豊富に盛り込んだテキストを展開しているという矛盾のことですが、作品発表時に転換期にあった『新青年』の生き残り策の現れとして、論者はこの矛盾を説明しています。モダンなりベラルさを売りものにしてきた雑誌が、その特徴を消さないまま、戦時下のプロパガンダ・メッセージを積極的に取り入れて、生き残りをはかった結果、こうした二重の戦略になったとします。

「パロディ」という特集では、『断腸亭日乗』を論じたものがあり、大正から昭和30年代まで続く、荷風の、この日記の、戦時中の部分に焦点をあてています(David Earhart)。日本が勝っていた大戦初期には政治への痛烈な風刺がめだっているが、終戦前の二年ほどは、空襲に繰り返し襲われる深刻な恐怖の記述が中心になり、政治を笑う余裕が失われていくこと。また、戦後の出版の時点(1947-48)では復興へ向かう時代の流れに呑み込まれて十分感じ取られなかった、作品の反戦的な風刺の力が、時間を置いた現在の環境の中ではっきり見えてきたことなどが論じられています。

また、「風景論」という特集には、沼正三『家畜人ヤプー』論があります

(Christine Marran)。この作品は、白人女性が支配する王国の話で、日本人を子孫とするヤプーという奴隷を便器からマスターベーションの道具にいたる生活用具に変形して飼いならしつつ君臨しているという、マゾヒズムのSF小説として知られていますが、論者は、欧米帝国主義の自己正当化の論理、すなわち、人種的、道徳的、ハイテク産業文化上の優者による劣等者の支配と矯正という理屈が、強者の弱者へ向かう倒錯的な性の欲望の表現に集中することで、西洋帝国主義の言説の基盤にある道徳的な理由付けへのアイロニカルな批評になっていて、その点に作品の真価を読んでいます。この場合、非西洋からのポストコロニアルな環境の中での読み返しという点でも模範的な作品という位置づけです。

この「風景論」特集には、漱石の「琴のそら音」の、都市を歩く描写に焦点をあてた読みの試みもあります(Michael Foster)。インテリの語り手が友人の家で幽霊の話の聞かされ、古い因習を笑い飛ばしていたのが、夜中、友人の下宿先の白山御殿町から茗荷谷を通して小日向台町の自分の家へ向かう中、闇の中の道の起伏の折々に、特に、谷や坂の名前(「極楽水」、「切支丹坂」など)に触発されて、繰り返し死の恐怖に迫られ、風邪で寝込んでいる許嫁の容態が心配でなくなり、翌朝あわてて、彼女の家を訪問するといった話ですが、論者は、夜中の暗い東京の風景を横切る経験が、語り手の抑圧している、幽霊に生き生きと反応してしまう感性、前近代の感受性を噴出させる経験として書かれていると指摘しています。

この論文には、セルトーの「都市を歩く」を引いて、夜の町を頼りなげに歩み進む語り手の実践と、作品という風景を一回ごとの新しい経験として生きる、読むことの実践の共通性が語られていますが、こういう読み方が、読むことへのもうひとつの関心なりアプローチとの橋渡しになるのではないかと思います。

作品を読むことの実践、パフォーマンスとしての一回性、特に、作品の独自の個性に感動する、大げさに言えば震え上がるような経験こそ読むことの醍醐味だとすると、それはどう語るべきかといった作品の読み方への関心が、文化・歴史論的な読み方の対極にある、もうひとつのアプローチになるのではないかと。その点を以下では、しばらく検討してみたい。

そのモデル・ケースと言える例として吉増剛造さんの講演の話をしてします。私が議長をした2002年の会議の基調講演で、氏は短歌を味わう自分独自のやり方を語っています。茂吉、与謝野晶子、寺山修司など、近代歌人が自作を朗読しているテープなりレコードがあり、それを何度も聞いて、個々の作品のニュアンスを味わうという方法で、さらには、集められている歌の並べ方を考えて、自分にとって一番気持ちのいい並び方を見つけるところまで味わい込んでみる。最終的には、自分ヴァージョンの与謝野晶子詩集等のテープが作れるところまでいけば、楽しい歌との付き合い方になるというのです。

個々の歌を読み込むやり方は以下の通りです。うたを読む声の流れに注意し、それが微妙に変化したり途絶えたりする箇所、微笑な綻びを開けている箇所の気配を特に慎重に味わう。この気配を軸に、個々の歌の個性を読み、さらには歌人が歌を紡ぎだすクリエイティブな急所そのものを感じ取ろうとする。一例として寺山修司の歌の以下のような読み取り方。まず、「新しき仏壇買ひに行きしまま行方不明のおとうとと鳥」という歌の、「オトウトのト」と「トリのト」が「くっつかないように慎重に」話し手が読む、その読み方に着目。この箇所のまとめ方に、さまざまな花をつかんで一気に投げ込むような（華道の投げ入れに似た）、ことばのつかみ具合を見て、そこに、さらに歌人の創造行為の本質にある「賭博性」を感受し、そういう本質がむき出しになった歌として以下を引く。「売りにゆく柱時計がふいに鳴る横抱きにして枯野ゆくとき」。「売る」行為に特別に反応する寺山が、その気分を可視化してみせている、柱時計を横抱きにした「佇まい」のイメージの見事さに心が掴まれるという読みの流れになります。

寺山という歌人が自分のうたを詠む、その実践ににじり寄り、その声にまつわる微細な匂いの気配を嗅ぎ取ってみせる読みの実践。そういう読む行為の生き生きとした現場を実演してみせる講義は見事で、文化的な読みの盲点を突いた、もうひとつのアプローチを示しています。文化や歴史を語る説明的なアプローチとは別種のもの、意味・説明から逸脱する〈出来事〉としての文学が紡ぎだされる現場に迫ろうとするアプローチです。ここでは、テキストにもぐり込んで行く読み手の、生産的な単独性が前提になり、それぞれの読者にユニークな読みを誘う〈開き〉に文学テキストの魅力を見ている点が注目されます。

アメリカの研究者にも、文学の出来事性に理論的に焦点をあてつつ、個々の作品のことばの、読み切れない力を読み込んでいくというアプローチを取る人はいます。意味の外へ読み手を誘惑することばの現場、本質的にスキャンダラスな事件の現場が文学の場なのだという読み方から、川端、三島、大江など近代文学のキャンソンのことばを大胆に読み直していくHosea Hirataさんなどが代表的です。

作品の文化・歴史上のポジションを読む方向と作品のユニークな個性を読む方向の両方に目配りした議論が熟していけば一番いいだろうと個人的には思っていますが、実際には大変で、そういう形でのすぐれた論文はまだ少ないようです。その点で一定の成果をあげていると思われるものを最後に紹介しておきます。2007年にプリンストン大で「文学と文学理論」という総題の大会を開きましたが、特に、漱石の『文学論』を論じたパネルが印象に残りました。このパネルが画期的な理由のひとつは、日本発の理論を論じた点で、デイスカッサントが率直にふれている通り (Brett de Barry)、西洋は理論を発する側、非西洋はそれが説明する対象という西洋優位の偏見の見直しという側面をもっています。この点には複雑な含みがありますが、ここでは、変化のきざしが意識され始めたことに留意しておきます。

さて、『文学論』をアメリカのアカデミアの中で現在どう読むのか。その点で、興味深いふたつの論文を紹介します。Michael Bourdaghsさんはコピーライトと

漱石といった迂遠な視点から話をはじめています。漱石と同時代の法学者、水野錬太郎は日本のコピーライト法の制定を主導した人物で、彼はそれを著作権と版權の組み合わせとして定義し、作品のクリエイティブな創作者／創始者としての作者に近代的な権威と権利を与えた。一方、漱石も文学をF+fという組み合わせの総合として示したわけですが、ここではFが作者に発する作品のおおやけの意図とか意味で、それが、f、すなわち、個々の読者の読み行為に伴う私的でコノタティブな付加要素によって、絶えず、価値を流動させていく、そういう活動の全体を文学という領域として示した。読者が作者／作品へ介入する点を重視するこの見方は、セルトーの読むことの実践の捉え方と本質的に同じだとボーダッシュさんは主張し、水野が作者に与えたロマンチックな近代イデオロギー（オリジナルで、ほんものの生産者の特権化と神話化）とは異質な現代性をもっている点を強調します。そして、コピーライト法の現代の展開を見ると、作者の特権を拡大解釈し、商標登録とか復刻版の版權の権利とかでも、最初に投資した企業に権利が集中し、それに後発的にひねりを加えたりする、いわば漱石／セルトー的な<読者>の実践が法的に禁じられる展開が見られる。従って、現代的な生活政治の文脈で、小文字のエフの、テキストへの生産的な加担を強調した漱石の教えの含意するところは大きいという結論になっています。

ボーダッシュさんの論文は、『文学論』に「文学は誰のものか」という根本的な問いを見だし、「作品は作者のものではない」という漱石の主張に、現代の読者（アメリカで日本文学を論じるアメリカ人の研究者）としての論者の共感を語ったもので、今回のシンポジウムのテーマへの答え方のひとつにもなっています。

もうひとつの論文はAtsuko Sakakiさんのもので、これは前者とは対照的に、『文学論』を主として内側から読み込んでいます。榊さんはまず、『文学論』が文学の普遍性を論じようとし、文学と科学をつなげるものとして理論を構想している点、文学をめぐる狭義の定義の外へ出ようという意識の強さに注目します。よく引かれる、漱石の漢詩好きとイギリス文学への違和感にしても、これを歴史的に捉えると、文語を支えにした古典文学一般と近代文学としてのイギリス文学との違いをめぐる反応としても読めることになり、その場合、近代文学の特徴である、国語と国文学を不可分のペアとして扱い、それが各個人をそれぞれの国別アイデンティティに囲い込む、そういう近代イデオロギーそのものへの漱石の違和感としても読めるわけで、そういう近代が拘束する条件からの逸脱の企てとして論者は『文学論』を読みこんでみせます。

この作品は大量の文例を引用していますが、英語の引用が、初出では翻訳なしで、そのまま、投げ込まれている点に論者は注目し、漱石は翻訳を拒否する立場にこだわることで、翻訳の背後にある文学メッセージの普遍性という前提への異和を暗示しており、英語と日本語が併存するテキストを織り続けることで、母語の自律性、文学作品の文化アイデンティティの均質性という神話にも抵抗していると、異質な国語たちが出会い続ける作品のハイブリッドなテキスト空間は、漱石

にとっての〈文学〉のヴィジョンをそのまま可視化してみせているのだと主張します。

ついで、榊さんは作品構成のもうひとつの大きな特徴として、論の進め方の唐突さと見通しのなさを指摘します。F+fにしても、最初に唐突に、ゆるい定義で導入されたまま、それを前提にして、いわば連想式の、横に延びて行くやり方でさまざまな文学カテゴリーの分類が連綿と続いていく。ふつう、われわれは文学の理論というと、因果論的な説明の地図をもらって、その見通しに従って、文学の歴史上の発展といったものを読むものと思いがちであり、漱石の『文学論』の分かりにくさの大きな理由のひとつは、その構成が、この暗黙の前提を無視している点だと論者は指摘します。そして、『文学論』の書かれ方と霧のロンドンの中に迷い込む歩みをしつこく繰り返した漱石の散歩の欲望を平行させて論者の結論にしています。「次は何？」という〈近接〉への欲望が共通しており、それは異質なものが異質なまま出会う、開いた空間への関心であり、『文学論』の漱石は、こうして、文学と科学、レトリックと言語学、中国語と英語を大胆に近接させ、近代文学の狭い定義を問い直し、それを開く可能性を実験したのだとするのです。

漱石は読者の立場から「文学とは何か？」という定義の問いを立て、それに「どう書くか？」という実践で答えたというのが榊さんの論点で、その「どのように」の特徴を検討しています。ロラン・バルトのテキストの分類に、社会／文化が常識化している読み方で読み切れてしまうテキスト(lisible; readerly)と読み手が創意工夫をこらして自分なりに書き込んでいく形で読むテキスト

(scriptable; writerly)という区別がありますが、榊さんの読み方を言い換えると、漱石は〈文学〉を、まさにwriterlyなテキストとして読んでいたということになります。

上のふたつの論文は『文学論』の中に、〈読者の能動的な読みの実践〉という力点を強調している点で共通しており、論者自身がそれぞれ工夫をこらして漱石作品との対話を試みることで、漱石の論点そのものを実践してみせている点でも共通しています。自分らしく読もうという関心と連動しつつ作品の個性に迫ろうという企てになっているのです。一方、作品をその文化・歴史の文脈(狭義には、欧米コロニアリズムの時代の中で日本が新興の植民地支配者として台頭し始めた時期、広義には、〈近代〉という世界観が自然化されている時代)に位置づけ、その主流をなすイデオロギーなりドクサと作品の距離を論じることが、作品のユニークさを論ずることと連動する論旨にもなっています。さらに、歴史への関心という意味で付言すれば、ふたりとも、いま、アメリカで日本文学を読んでいる自分の立場にひきつけて漱石を読んでいるのも共通しています。その意味でも、このシンポジウムの関心のあり方と重ねつつ、考えていただく意味があるだろうと思い、ご紹介しました。

以上を発題のための下書きとします。